活動状況報告書（11 月分）

スポーツコース　佐藤　弘也

私は 11 月 9 日に日本を出国し、カナダのトロントに到着しました。トロントには約 2 ヶ月間滞在し、語学学校に通うこと、2 回の車いすカーリングの合宿に参加する予定です。

トロントは移民が人口の半分以上を占めていて、街を歩くと本当に多民族の都市だと感じます。地下鉄や路面電車、バスが整備されていて、生活圏ではよく電動車椅子を利用している方を見ますし、これらの公共交通機関の全てで車いすの方が利用されています。スーパーやほとんどの駅には自動ドアや広い通路があり、車いす利用者を含むすべての人が使いやすくなっていました。また公共交通機関で子供、高齢の方を見かけると 100%に近いぐらい席を譲る mind は非常に素晴らしく感動しました。

語学学校は 11 月 13 日からスタートしました。事前テストの結果から Intermediate(中級)クラスに入りました。クラスは多くても 10 人ぐらいの規模で国籍はブラジル、メキシコ、パナマ、コロンビア、韓国、フランス、日本などのメンバーでした。もちろん語学を学ぶことが主の目的ですが、カナダやそれぞれの出身国での生活や文化も知ることができ、また表現方法や考え方の違いも同時に学ぶことができ非常に良い学びになっています(写真 1)。

11 月 24 日から 26 日までの 3 日間、the Toronto Cricket, Skating, and Curling Club で行われた Ontario Open Bonspiel に参加しました。これはトロントで行われた車いすカーリング競技の大会で、オンタリオ州を中心に合計 6 チームが参加、その中に NATIONAL WHEELCHAIR CURLING PROGRAM の次世代チームが参加していました。まず世界のカーリング競技人口の半分を占めると言われているカナダで、車いす部門でもレベルの高さを見ることができました。車いす競技者にとっての競技場の使いやすさはもちろんですが、関わるスタッフの慣れた様子を見ると車いす競技が非常に溶け込んでいるように感じました(写真 2、3)。

代表選手とコーチに話を伺わせて頂き、カーリングに対する考え方、生活の中でどうコミットしていくかなど取り組み方の違いを感じることができました。またカナダ代表の育成のシステムや方法や選抜方法などを伺い、積み上げられてきた歴史とカーリング競技にコミットできる体制がカナダ代表がパラリンピックで毎大会メダルを取れる一要因であることを知ることができました。

日本においては、競技人口や選手の生活スタイル、地域性の違いなどはありますが、まだまだやれることがあることが沢山あると感じました。まだ留学が始まって約 3 週間ですが、さらに学びが深められるように頑張りたいと思います。

写真 1 語学学校の先生、メンバーと

写真 2 the Toronto Cricket, Skating, and Curling Club で行われた Ontario Open Bonspiel の様子

写真 3 NATIONAL WHEELCHAIR CURLING PROGRAM の次世代チームと